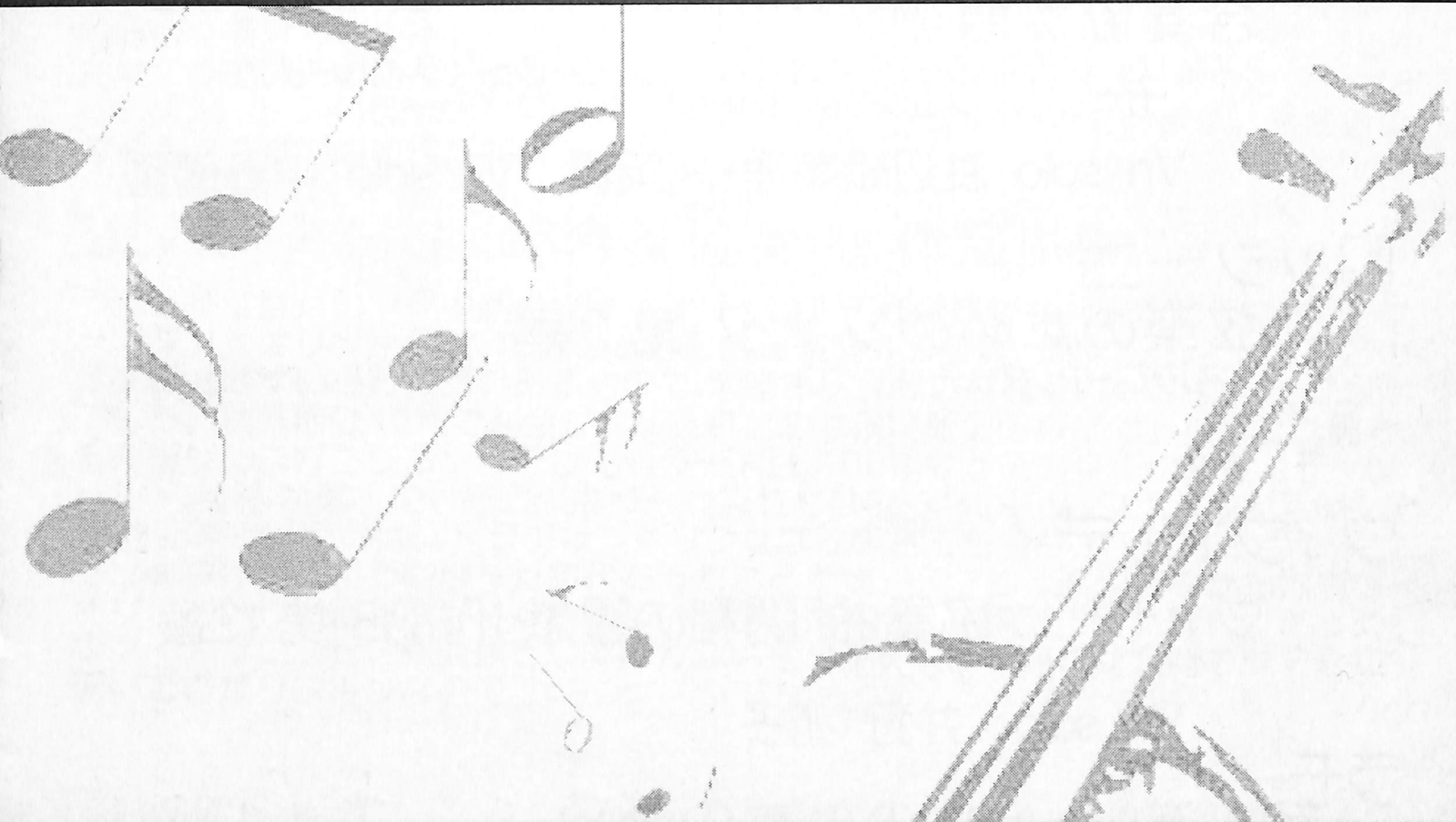
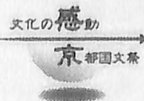


52nd Concertino di Kyoto

第52回 コンチェルティーノ ディ キョウト 演奏会





主催 才能教育研究会京都支部
後援 京都市

問合せ 075-781-7998 (新井)
HP <http://www.suzukimethod-kyoto.com/>







文化の感動

京 都 国 文 庫

主催 才能教育研究会京都支部
後援 京都市

問合せ 075-781-7998 (新井)

HP <http://www.suzukimethod-kyoto.com/>



まち全体を
学びと育ちの場に

プログラム

バッハ (井手章夫編)
小フーガト短調

コレルリ

合奏協奏曲 作品6-9

プレリュード(ラルゴ)-アルマンド(アレグロ)-クーラント(ヴィヴァーチェ)-
ガボット(アレグロ)-アダージョ-メヌエット(ヴィヴァーチェ)

Vn solo 渡辺絵美理・高岡舞 Vc solo 中野優香

ロッシーニ

弦楽のためのソナタ 第2番

アレグロ-アンダンテ-アレグロ

ヴィヴァルディ

ヴァイオリン協奏曲「調和の靈感」作品3 第12番

アレグロ-ラルゴ-アレグロ

Vn solo 井狩 苑子

ラモー

「6声のコンセル」第6番

めんどり-メヌエット-エンハーモニク-ジプシー風

指揮 江村 孝哉

才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(Vc)レイ・モイーズ(F)フェリックス・アーヨ(Vn)といった演奏家と共演してきた。

コンチェルティーノ ディ キョウト

Violin

井狩 苑子 福永 祥子 渡辺絵美理
村山 直 沼田 大季 高岡 舞
佐々木めぐみ 佐々木弘明

Viola

江村 美由紀 仲佐 悦子

Violoncello

中野 優香 森田 健二

Contrabass

赤松 美幸

Cembalo

永田 悦子

曲目紹介

バッハ (井手章夫) フーガト短調

冒頭に呈示されるフレーズはとても有名。フレーズのインパクトが強いので一度や二度しか耳にした事が無いのに、ずっと覚えているのだと思います。フーガとはひとつの主題を基に複数の旋律が後を追って展開する様式ですが、似たものであるカノンが「かえるの歌」のような同じ旋律の繰り返しであるのに対し、フーガはより自由に異なった旋律も登場してきます。そのため音楽の奥行きがぐんと広がるのです。なお、この曲が「小フーガ」と呼ばれるのは、同じ調の『幻想曲とフーガBWV542』の「ト短調の大フーガ」と区別するためだといわれています。編曲者の井手章夫は当団の初代指揮者。

コレルリ

合奏協奏曲 作品6-9

コレルリはバロック中期のヴァイオリニスト・作曲家です。少年時代にボローニャでヴァイオリンを学び、17歳のときには音楽協会の会員と認められました。この音楽協会はずいぶん権威のあるもので、栄誉ある会員になれるのは20歳以上が原則でした。例外的に10代で入会が認められたのは長い歴史のなかでもたった二例で、その初ケースがコレルリ、そしてもう一人は、100年ほど後の少年作曲家・モーツァルト、当時14歳！でした。もう一つ忘れてはならないのは、コレルリが活躍した17世紀末というのはストラディヴァリウスほかの名工たちが、すばらしいヴァイオリンを製作するようになった時代だったことです。天才的楽器製作者たちがヴァイオリンという楽器をかつてない美しい音色の楽器へと完成していく時代にあって、ヴァイオリニスト・作曲家として輝かしいイタリアヴァイオリン音楽の歴史を切り開いたのがコレルリなのです。

ロッシーニ

弦楽のためのソナタ 第2番

ロッシーニは大変人気のあったオペラ作曲家で、19年間に39曲、特に1812年から18年の7年間に27作という超ハイペースでオペラを書きました。名実ともに偉大な作曲家と見られていたロッシーニは1829年最高傑作、歌劇「ウィリアム・テル」をパリで初演し成功を収めます。ところがこの直後、突如音楽界からの引退を発表したのです。この時まだ37歳、とても隠居するような年齢ではありません。残る39年の人生の間、ピアノ小品や歌曲、若干の宗教曲などを思い出したように書いた程度で、二度とオペラに手を染めることはありませんでした。一体なぜ、人生の半ばで作曲家としての栄光を放棄してしまったのでしょうか？それは、楽才が枯渇したからでも、怠け者だったからでも、色恋沙汰からでも、病気からでもありません。何と、料理に没頭し高級レストランを開き、豚を飼育するためだったのです。

「弦楽のためのソナタ集」は12歳の時の作品で、ヴァイオリン2、チェロ、コントラバスという変わった編成は、ヴィオラをあえて使わなかったのか、高音部と低音部との対比をつけたかったのか、たまたま演奏できるメンバーにあった四重奏編成がこれしかなかったのかはよくわからないのです。ただ編成のおかげなのか、2台のヴァイオリンの活躍は技巧的であって華やかです。チェロとコントラバスはそれぞれ独立した声部を与えていて、チェロは高音部での自由性が生まれ、内声部を埋める役割を担うことが出来、コントラバスはしっかりと低音を支えながら、ヴァイオリンやチェロと対等に独立して活躍する部分も作っています。

ヴィヴァルディ 協奏曲「調和の靈感」作品3第12番

ヴィヴァルディはその生涯に500曲余りの協奏曲、70曲以上のソナタ、約45曲のオペラ、それにオラトリオ、ミサ曲、モテットなどの宗教音楽を残しましたが、オペラについては今日ではほとんど演奏されることがありません。宗教曲にも面白い作品はありますが、ヴィヴァルディの作曲活動の中心的な位置を占めるのは、やはり500曲以上残された協奏曲であると言えるでしょう。残された協奏曲のうち300曲余りはソロ・コンチェルトで、中でもヴァイオリン協奏曲が220曲余りと大部分を占めています。ヴィヴァルディも最初はコレッリの伝統を受け継いだトリオ・ソナタや合奏協奏曲を作曲していたのですが、まもなく、ひとつの楽器に独奏させるソロ・コンチェルトを主に作曲するようになりました。

1711年に出版された協奏曲集《調和の靈感》op.3では、まだ合奏協奏曲とソロ・コンチェルトが混在しています。一般的な急-緩-急の3楽章からなっています。3楽章形式の協奏曲は、トレッリ(1658-1709)が最初の作例だと思われませんが、実質的な完成はヴィヴァルディによって行われました。この形式はヴィヴァルディの作品を通じて、イタリアのみならずヨーロッパ全体に広がって、後の時代に受け継がれて行くことになります。また、速いテンポの楽章ではリトルネッロ形式が用いられ、トゥッティ（総奏）の演奏する主題がソロ（独奏）を挟んで、調を変えながら何度も繰り返し演奏されます。総奏をT、ソロをSとすると、T-S-T-S-T-S-Tの形で展開されて行くのが基本的な形でした。これも原型はトレッリの作品にありますが、最も効果的に使用した作曲家はヴィヴァルディであり、彼の完成させたリトルネッロ形式もまた、後の時代の協奏曲の基本的な技法のひとつとなって行きました。

ラモー 「6声のコンセール」第6番

フランス東部の町ディジョンに生まれ、1722年からパリで活動した、フランス後期バロック最大の音楽家です。17世紀のリュリによる伝統的な荘重な様式にイタリア的な快活な様式を取り入れて、伝統的なフランス音楽と先進的なイタリア音楽の調和に努めた作曲家でありました。フランス各地で教会オルガニストや音楽教師として過ごした前半生にはいくつかのクラブサン曲（クラブサンはチェンバロのフランス名）と音楽理論書を出版しただけでしたが、50歳の時に初めて作曲したオペラが好評で、その後次々と発表したオペラにより名声を得ると、60歳を過ぎてからルイ15世の宮廷作曲家に任ぜられ、フランス音楽界の第一人者としての地位を確立しました。しかし、その斬新なスタイルは、保守派の抵抗に遭い剣を身につけて歩かねばならなかつたと言われています。